古典集成

竹馬狂吟集　新撰犬筑波集

木村三四吾　井口　壽　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第七七回）

竹馬狂吟集　新撰犬筑波集

昭和六十三年一月十五日　印刷
昭和六十三年一月二十日　発行

校注者　木村三四吾　井口壽

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四－八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価二二〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Miyogo Kimura, Hisashi Iguchi Printed in Japan, 1988.

ISBN4-10-620377-4 C0391

目次

凡例……三
竹馬狂吟集……九
新撰犬筑波集……一一七
解説……三三九
付録
諸本校異一覧……三三三
初句索引……三九七
図録……四〇八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡例

本書は室町時代の人びとの明るく楽しい心と、それまでの伝統的貴族的な文学から新しく庶民的な自由な境地のものへと移っていく姿とを感じていただこうという意図のもとに、『竹馬狂吟集』と『誹諧連歌抄』（『新撰犬筑波集』とも言われています）の注釈説明を試みたものです。

〔定本について〕

『竹馬狂吟集』は現存唯一の伝本である天理図書館蔵竹屋光忠筆本を、『誹諧連歌抄』はその編者である宗鑑の自筆本のうちで最も整ったものとして、同じく天理図書館綿屋文庫蔵大永奥書本を採りました。（両本とも『天理図書館善本叢書』第二期第二十二巻に複製所収）

〔本文について〕

読みやすくするため、仮名は変体仮名を現行のものに、仮名づかいは原則として歴史的仮名づかいに改め、また、『竹馬狂吟集』の序文には句読点をつけ、詞書には読点（長文の場合は句点も）をつけました。

適宜漢字を宛てましたが、必要な場合にはそれに振り仮名をつけました。

明らかに誤字脱字と思われるものは、その旨を注して改めました。

〔注解について〕

各句に一連の番号をつけ、頭注との関連をわかりやすくすると共に、検索の便を考えました。また序文・詞書中の語句にも必要に応じて番号をつけ、頭注で説明しました。

四季・恋の句には句中のそれにあたる語を下欄にぬき出しました。

現代語訳はセピア刷とし、できるだけ作者の気分が味わえるような表現につとめました。

句の説明では、句が作られる上での技巧や句作り、句のねらい、或いはどこが面白いのか、どの点で俳諧なのかがわかるようにつとめました。

語句の意味は、当時の使い方がわかるよう、できるだけ当時の作品や辞書を引用するようにつとめました。また図解による方がわかりやすいと思われるものは、その語に＊印と番号をつけ、図解を巻末にまとめて示しました。

〔解説について〕

まず誹諧連歌の成立に至る過程のおおよそを述べ、次に誹諧連歌自体の中での変化成長と衰退に触れました。また宗鑑の略伝を述べて編者の面から、誹諧とはどのようなものであったかを考えてみました。それぞれに本文理解の手掛りになれば幸甚です。

〔付録について〕

諸本校異一覧・初句索引・図録を添えました。校異一覧は、誹諧連歌には定本というものはなく、口から口へと伝えられ或いは書き写される間に句形が異なってくる場合が多いので、現在知られている代表的な諸本によって句毎にそれらの姿を集め、特に関心のある読者の参考としました。なお、両集ともに収録されている句（類句）が検索できるようになっています。図録の番号は前述のように頭注の＊印の語につけた番号です。

本書の執筆にあたっては、有田静昭・後小路薫・村田穆・山本唯一の諸氏から常に懇切な御指導・御援助をいただき、いわば共同研究の結果とも言えるものです。また伊地知鐵男・尾形仂・金子金治郎・木藤才蔵・栗山理一・鈴木棠三・福井久蔵・吉川一郎の諸氏を始め多くの方々の著書・論文の学恩を蒙っております。紙幅の都合でいちいち明示できなかったことをお詫び致しますと共に深く御礼申し上げます。

竹馬狂吟集　新撰犬筑波集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

竹馬狂吟集

一 神代の昔、日本武尊と火焼翁とが筑波を過ぎ甲斐の酒折宮で片歌で問答したのが連歌の始めとされた（解説二三三頁）。そこから連歌を筑波の道という。「筑波嶺のこのもかのもに影はあれど君がみ影にます影はなし」（『古今集』）をふまえ「このもかのも」の語呂から「餅」を導く。二 「筑」を「搗く」の掛詞とし、「餅」「食ふ」「咥ぶる」（かじる）「捨つ」と縁語で仕立てた。「神」と「咥ぶる」は頭韻をふむ。「捨てぬ」には仏の摂取不捨をきかす。三 以下自分のことを言う。『古今集』序の「難波津の歌はみかどのおほむ始めなり」から歌語「難波津」、その難波津から「葦」を出し、「足腰」と続ける。四 「和歌の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさしてたづ鳴き渡る」（『万葉集』）により「和歌の浦波」「浦波立つ」「立ち居（足腰に対して）」と続け、「葦辺」を「屁」に掛ける。神仏私のことから、しかし元来詩歌というものは、と文脈を転じている。五 中国では『論語』に「子曰詩三百一言以弊之曰思無邪」（当時抄物で邪をヨコシマと読んでいる）とあり、日本でも『古今集』序に「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」と記されているから、全うな人なら由緒正しい詩歌を作るのですが。六 詐って狂人風を装っている者、いわゆる風狂者。中国文芸の重要な要素の一つ。ここは、私は連歌にして連歌ではない俳諧連歌を作る一人として、の意。七 和歌連歌の雅正さに反し、卑俗な俳諧連歌の作品を集め、その世界を主題として。上文の「狂」を「経」に通わ

竹馬狂吟集

一 筑波の山のこの餅かの餅、食はぬ人も侍らぬ折なれば、
二 神も咥ぶり、仏も捨てたまはぬとやらん。此中にして、
三 波津のあしこしも立たぬほどに衰へ、
四 和歌の浦波立ち居にはあしべの音高きのみなれども、
五 唐にはよこしまなからんばかりといひ、日本には心の種とやらんかけるなれば、清狂佯狂のたぐひとして、詩狂酒狂のおもむきを題とし、竹馬狂吟集と名づけ侍り。凡、東八にたづぬるたよりもなく、ひろく西九にもとむるにもあらず、
一〇 人の語れる口を移し、己が聞耳に入るがばかり也。ことさら井の底の蛙の人道、
一一 住みぬる水の浅々と、林の下の梅法師匂ひなく、痩々

（連歌を）
（神や仏も連歌をなさるとやら）
（葦・足）足腰も立たぬほどに老い衰え
（当時抄物で邪をヨコシマと読んでいる）
（東八国に）
（西国九国に）
（偶々自分の耳に入ったものだけである）
（世間狭いかはづ坊主）
（底も浅く）

としたるばかりのみならん。しかはあれども、梨[一三]をもとめ
連歌をする人を導びこうというのではなく ただ当座の御機嫌をとりむすび興
栗をひろふ人を道引かむをしらず、心をとる、心をなぐさ
をやる手がかりだけの集です
むるたよりばかりぞかし。これもまた里犬[一四]の音こゑさながら
らみな得解脱の便、[一五]山田の鹿の鹿火は実相のたぐひ、尊く
思ふこころばかり也。もし用ふる人あらば、上戸の肴とや
もし本集を読む人があるならば 酒飲
みの肴のように座興を進める仲立ちとなるだろう
なり侍らん。

時は 明応八年[一六]
ときに明応の八とせ二月の十日あまり
以上の如くです
しるすことしかなり。

し、『詩経』『書経』をもじる。八「筑波」をもじると共に初心未熟者の意を含め、「狂吟」は清狂の者の連歌の意を託す。九「凡」は発語。この期の抄物に多く見える。「東八」は「西九」と対句形式。資料探索の限りを尽したわけではないことをいう。一〇本集にとり入れた作品は書物からではなく伝承によったという意。一一「井の内の蛙大海の広きことを覚らざるに似たり」（『宝物集』）による。原本「人通」を文意により「入道」に改む。一二梅林の話を聞いただけで唾が出て渇きが治った故事（『世説新語』）をふまえ、「梅」から「梅法師」を出し、「入道」に「法師」、「浅々」に「瘦瘦」を対して何の風情もない句集であろうと卑下する。一三有心連歌をよむ人を「柿の下衆」というのに対し、無心連歌をよむ人を「栗の下衆」といった。「梨」は栗の縁で対句にすると共に「無し」をふまえる。一四一休宗純の『自戒集』にも「煩悩ハ家ノ狗、打トモサラスト云本文アリ」とあり、去りがたい煩悩を犬に喩えるのは当時の通念で、それに『往生要集』の「煩悩即菩提」を結びつけて、この集も、里犬の声がそのまま解脱を得る手段となるように、本式の連歌を知るよすがにもなると述べる。一五「秋の野に妻無き鹿の年を経てなぞ我が恋のかひよとぞなく」（『古今集』）や「一々相好是実相」（『往生要集』）をふまえ、山田の鹿の鳴声も実相（真実の姿の現れ）の類であるように、こんな俳諧でも真実を示す一端と尊く思うので、あえてこの集を撰びました。一六一四九九年。

1　北野天神のお好きなものは梅の花なんでしょうね。

「北野どの」は北野天神、即ち菅原道真。天神縁起説話などを通じ、天神と梅は縁が深いので「好き」といったが、同時に連歌の神として「数寄」の意を寓している。「どの」は当時女性に対する称呼の一つ。それで「北のどの」で奥方の意が生じる。道真の「こち吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」（『拾遺集』）は有名。表の意に対し、裏に北の方（奥様）は懐妊されて酸いものを好まれるよ、を含めたのが当句の見どころ。好き―酸き―梅（漬け）の言葉遊び。

2　瓶に仕込んだ糀の米がうまく仕上がって、瓶に挿した柳のつくり花のように、見事な佳い酒ができ上がりましたよ。

「柳の酒」は室町時代京都西洞院仏光寺の柳屋で醸造された銘酒で、「柳」は酒の代名詞にもなった。「瓶」「さす」「つくる」「花（糀の花）」は酒の縁語。「つくり花」は正月の飾りもので、餅花ともいう。藁や柳などの木の枝に餅をちぎってとり付ける。単純な見立ての言葉遊びに過ぎぬが品のよい句作りの祝儀句。

3　松風は風流なものだが、桜の花盛りの時だけは吹くなよ、ふぐり風で花が散ると大変だ

風よ吹くなということを「松ふぐり」（松笠）の言葉の縁で松風をふぐり風（疝気。睾丸の病気）に言い重ねた句作り。疝気になることを「おこる」という。花に人間の病を組合せた面白味。「おこすな」で切れる形。

竹馬狂吟集巻第一

春部　発句

1　北野どの御すきのものや梅の花　梅

2　かめにさす柳のさけやつくりばな　柳

3　花のころおこすな松のふぐり風　花

4　まあそれはそれでよいよ。だから降るものなら降ってくれ。麦の穂出しにさえ好都合であれば、よしそれが花を散らす雨であっても我慢しよう。

『玉海集』に「よしやふれ麦ハあしくと花の雨　細川幽斉」と出ている。これは『狂吟集』とは趣向が逆の句作り。「むぎだし」は麦の穂ばらみ、麦の穂が出る意。「よしやふれ」で切れる形。普通嫌われる「花に雨」をよい意味に言いなしかえた趣向の面白さ。

5　犬桜よ。犬という名があるからには、よし桜にしても犬なんだ、折り取るその人の手にくらいつけ。

犬桜の「犬」から手にくらいつけといった面白味。「犬桜」は桜の一種、花が小さく美しくないので、犬の語が付けられた。『犬筑波集』では、「すねにかみつけ」となっている写本が多い。すねの方が手より実際的だからか。

6　その名に因んで拳をにぎって、辛夷の花が今まことに見事なさかりですよ。

「手」「握る」「こぶし」が縁語で、「拳」と「辛夷」の掛詞。「こぶしの花のさかり」という実事を「手をにぎるこぶし」と虚の形でまとめた面白さ。また、「手に汗を握る」の連想から感嘆の心をも含める。辛夷を拳に見立てる手法は近世初期の俳諧作品に大変多い。辛夷はモクレン科の落葉高木。三、四月頃枝先に白い匂いの高い花をつける。蕾の形が拳に似る。

4　よしやふれむぎだしよくば花の雨　花

5　折る人の手にくらひつけ犬ざくら　犬桜

6　手をにぎるこぶしの花のさかりかな　辛夷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com